女神と精霊と学園物

風音 ツバキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
女神と精霊と学園物

【Ｎコード】
Ｎ０４４４Ｙ

【作者名】
風音　ツバキ

【あらすじ】
ここは、とある世界。
この世界にはそれぞれの方角に大きな都市が存在していて、特に戦争とか重苦しいようなことは無く、モンスターがいることを除けば平和な世界だった。
各都市には大精霊と呼ばれる存在がいた。

西のプラネテューヌには火、東のラステイションには地、南のリーンボックスには風、北のルウィーには水、そして中央のリーゼ・マクシアにはそれらを統べる精霊の王。

そしてそれぞれの都市の大精霊を守護する者、それを守護女神（守護神）と呼ぶ。

その都市の一つ、リーゼ・マクシアにはさまざまな存在が通う、マクシア学園という学校が存在していた。

この物語は、そんな学園に通う少年少女達の、ファンタジーでドタバタ騒ぎな日常を描いたものである――

※ネプテューヌ、ｍｋ２、ＴＯＸのキャラ達が入り混じっている上にオリキャラも多数います。ぶっちゃけ作者の自己満足作品でございます。

そういったものが無理という方は素直にブラウザバックするかウィンドウを閉じていただいたほうが言いと思います。

そういうのがオッケェイ！　な方は駄文ですが、どうぞ読んでいってくださいまし。

超次元マクシア学園生徒情報（前書き）

なんか学園物が書きたくて書いてしまった。反省はしてるが後悔はしてない。

本文にもある通り、キャラの配役がおかしいとかのつっこみは受け付けません！

超次元マクシア学園生徒情報

マクシア学園生徒、教職員情報

○一年生
フウ
ステラ
アド・バウンス
シュウ・アーヴィン
ネプギア
ユニ
ラム
ロム
エリーゼ・ルタス
フェイク・ザ・ハード
デスペア・ザ・ハード

○二年生
フウカ
ネプテューヌ
ノワール
ベール
ブラン
アイエフ
コンパ
日本一
がすと
ケイス
フロム

ユウ

○三年生
ジュード・マティス
ミラ・マクスウェル
レイア・ロランド
ガイアス
ウィンガル
アグリア

○教師
イストワール
神宮寺ケイ
西沢ミナ
箱崎チカ
マジック・ザ・ハード
ジャッジ・ザ・ハード
ブレイブ・ザ・ハード
トリック・ザ・ハード
アルヴィン
ローエン・J・イルベルト
ジャオ
プレザ

○校長
風音ツバキ

なお、一部の三年生生徒・教師へのツッコミは禁止とする。

超次元マクシア学園生徒情報（後書き）

更新速度は本編二作が詰まなければ遅いです。

各キャラの制服・教師姿は脳内保管でお願いします！

あとザ・ハード達は擬人化してます。

超次元マクシア学園生徒情報　オリキャラの頁（前書き）

この作品に登場するオリキャラの設定です。

一部元の作品と違うところがあったり、この作品初登場のオリキャラなど。

超次元マクシア学園生徒情報　オリキャラの頁

○一年生

・フウ
性別：女
種族：女神
身長：１５１ｃｍ
使用武器カテゴリ：杖、ナイフ二本、軽量銃火器
戦闘タイプ：魔法銃拳士

マクシア学園に新しく入学してきた生徒、ルウィー女神候補生達の妹。
友達想いの優しい心の持ち主。
ラム・ロム同様背が低いが、子供扱いされるのが嫌いなため背や胸の事を言われると怒る。
魔法や戦闘に関しては一年の中でもかなり高いが、勉学は余り得意ではない模様。

・ステラ
性別：女
種族：人間
身長：１５６ｃｍ
使用武器カテゴリ：魔砲銃、魔法刀
戦闘タイプ：魔術師

マクシア学園に新しく入学してきた生徒、フウとアドの幼馴染。
明るい性格で周囲に溶け込みやすい生徒。

魔術師としてかなりの高レベルで、全ての属性の魔法を扱うことができる。勉学も優秀。
しかし一人で複数のモンスターと戦う戦闘テストは得意ではなく、いつも苦戦している。

・アド・バウンス
性別：男
種族：人間
身長：１６９ｃｍ
使用武器カテゴリ：双剣
戦闘タイプ：双剣士

マクシア学園に新しく入学してきた生徒、フウとステラの幼馴染。
容姿はすこし青み掛かった黒髪の短髪でアホ毛があり、目は黒色の少年。
普段はめんどくさがりで近付きがたい雰囲気を出しているが、根は優しい心の持ち主。
趣味はシュウ弄り。
戦闘能力はなかなかで、戦闘テストでは好成績を残している。
が、魔法はからっきしダメな上に勉学も苦手で、授業中によく眠っている姿が確認できる。

・シュウ・アーヴィン
性別：男
種族：人間
身長：１６８ｃｍ
使用武器カテゴリ：剣
戦闘タイプ：剣士

マクシア学園に入学してきた生徒、初日でアドと仲良くなる。
金髪黒目の自称不良少年。
バカで弄られキャラな上へタレ、勉学・戦闘能力共に低い。
だがどこか憎めないキャラ。

○二年生

・フウカ
性別：女
種族：女神
身長：１５７ｃｍ
使用武器カテゴリ：大剣、大鎌、刀（ダーインスレヘザドイータ天叢雲ノ剣）
戦闘タイプ：魔法戦士（戦士寄り）

マクシア学園二年生の生徒、フウ、ロム、ラムの姉。
紅い目でフウと同じ長い髪を赤いリボンで結びポニーテールにしているのが特徴、胸はルウィーの女神にしては珍しく平均くらい。
ルウィーの姉妹ではフウとかなり似ている。
戦闘狂なところがあるが、根は良い生徒。
魔法も扱えるが、それ以上に近接戦闘の能力がすさまじく高い。
唯一校長と渡り合える生徒の一人。

○教師

・風音ツバキ
性別：女
種族：人間（？）
身長：１５５ｃｍ
使用武器カテゴリ：素手（その他なんでも）
戦闘タイプ：オールラウンダー

マクシア学園の学園長を務める、ぴょんと立ったアホ毛と八重歯が特徴的な謎多き少女。
容姿は肩より少し下くらいの茶髪ロングで瞳の色はスカイブルー。
いつも赤と白のヘッドドレスを身につけている。
見た目は中学生くらいの子供っぽいが、ちゃんと成人しているらしい。
見た目通り天真爛漫で面白いことが好きなので学園での騒動も止めずに見ていることも。だけど一応は常識人なので、度が過ぎるとちゃんと止める。
見た目は子供だが、頭脳はその辺の学者顔負けのレベル。そして戦闘能力もチートクラス。
普段は危険なので、両腕につけた黒い色の腕輪で力をセーブしているが、それでもかなり強い。
レイアの母親とはライバルだとか。
趣味はゲームで苦手な物はホラーや幽霊などの怖いもの。グロテスクなら多少は平気、だけどびっくりする系はダメ。

超次元マクシア学園生徒情報　転入生（他作者様のキャラクター）の頁（前書き

他の作者様のキャラ設定です。キャラを貸してくださった作者様達にはここでお礼を、ありがとうございます！

超次元マクシア学園生徒情報　転入生（他作者様のキャラクター）の頁

らい様より
○ケイス
性別：男
種族：人間
身長：１６５ｃｍ
使用武器カテゴリ：剣（ライトセーバー）、棍、槍
戦闘タイプ：剣士

マクシア学園に転入してきた二年生の少年。右手首に色々な物をしまったりできる不思議なアンクレットをつけている。
困ってる人を放って置くことができないが、度を過ぎることがあるのが玉にキズ。
数年前にノワールに助けてもらったことがあり、面識がある。
それが理由か、ノワールに対して淡い恋心を抱いている。
剣の腕には自信があるようで、剣道部顧問のブレイブに引けを取らないほど。
魔法の知識もかなりあるようだが、ケイス自身が扱うことはできないようだ。
頭もけっこう良いようで、成績はクラスの上位に並ぶほど。

リアルではおぜうタイプ様より
○フロム
性別：女
種族：人間（？）
身長：１５４ｃｍ

使用武器カテゴリ：重火器（主にグレネードライフル・ミサイル・レールガン）
戦闘タイプ：移動砲台

マクシア学園二年に転入してきた謎の女の子（？）。結構ドライな上面倒くさがり屋で宿題は直前まで置いておくタイプ（でも何故か提出時にはちゃんと終わっている）。過去傭兵をやっていた時期があり常識が他生徒と若干ズレている。
事情はフロムしか知らないがノワール、如いては女神という種族を恨んでいる。
絶対強者という存在を認めない節があり、フウカやツバキをよく暗殺しようとしている（しかし毎回失敗している）
ユウも例外ではなかったが、一度暗殺しようとして他の女神達＋イストワールに酷い目に遭わされたのであまり近寄りたがらない。
戦闘、勉強両方平均以上の能力はあるが戦闘タイプと性格の所為か協調性皆無。
戦闘は重火器による殲滅戦や狙撃が得意。逆に白兵戦や味方が多い包囲戦は苦手。
味方を巻き込んでいいのなら遠慮なく撃つから結構容赦はない。
何故か幼女（エリーゼ・ロム・ラム）に好かれる。が、本人に同性趣味はない（と本人は言い張っている）。

○フェイク・ザ・ハード
性別：女
種族：女神（？）
身長：１５２ｃｍ
使用武器カテゴリ：軽火器（主にハンドガン・アサルトライフル・サブマシンガン）
戦闘タイプ：ガンスリンガー

ユニとそっくりの新入生。ユニとは髪を下ろしているほどしか違いがないが、特に血縁関係はない。
基本的にフロム以外に対しては常識人＋突っ込みだが、フロムに対してはまさにデレデレ。フロムは同性趣味はないと言い張っているがどうみても恋人関係。
名前の通り偽物を好み本物を嫌う節がある。そのためか若干ユニとノワールを毛嫌いしている。
最初に自分を『フェイ』と呼ばせようとしたが失敗し、主張を続けているが未だ誰にも呼ばれたことはない。
どちらかと言えば勉強が得意。戦闘も苦手ではないがユニとしょっちゅう比べられ（しかも若干劣っている）嫌がることも。
偽物でも本物を超えることができるをモットーに修行しているらしい。
フロムとは逆で白兵戦が最も得意。得意な武器はアサルトライフルだとか（一丁づつ両手に持つ。命中精度は悪い）。狙撃が一番才能あるらしいが本人は嫌っている。

○デスペア・ザ・ハード
性別：女
種族：人間（？）
身長：１１２ｃｍ
使用武器カテゴリ：ダガー
戦闘タイプ：幻覚魔術師

がすとそっくりな新入生。がすとと比べ帽子がなく、茶色のロングポニーの髪型ということぐらいしか違いはないが、血縁関係はない様子。
人を精神的に陥れることが趣味で大の得意。話術と幻覚で相手を絶望させることに生きがいを感じているらしい。
そのため感情の起伏が大きい相手とよく話している。

フウカとは表面上は仲良くしているが水面下では腹の探り合いをしている（らしい）。
勉強が大の得意だが戦闘はどちらかと言うと苦手。
幻覚が効く相手なら無敵だが効かない相手には本当に何もできないことも。
どちらかと言えば指揮に長けている。
問題の教師、トリック・ザ・ハードをトリック様と呼んでいるがそこまで慕ってはいない様子。（ダガーで刺している）

トマト畑様より
○ユウ
性別：男の娘
種族：女神
身長：１６０ｃｍ
使用武器カテゴリ：双剣（零刹那、菊壱紋字）、その他なんでも
戦闘タイプ：魔法双剣士

マクシア学園二年に転入してきた、リーゼ・マクシアの守護女神。
実質他の女神・女神候補生達の兄。スパッツは標準装備。
ちなみにここではっきりと表記しておく。彼は男でもなく女でもなく、男の娘である。男の娘である。大事な事なので（ｒｙ
女神達＋イストワールにはかなり好かれていて、しょっちゅう取り合いが起こり、学校倒壊の危機（物理的）になりそうなところまで発展したところでツバキに止められる、というのがほぼ日常風景。
三年生で保険委員のジュードとはよくお世話になる（胃薬的な意味で）ので仲が良い。
戦闘技術は流石精霊王の守護女神と言うべきか、近接も魔法もかなりトップクラス。

勉強ももちろん得意なようで、ほぼ完璧な男の娘。

超次元マクシア学園生徒情報　転入生（他作者様のキャラクター）の頁（後書き）

キャラを貸してくださった作者様へ、何か他にありましたらメッセージでお願いします！

学校の最初はやっぱり入学式だよね！（前書き）

なんか、アルヴィンが銀八先生になりそうな予感が…

学校の最初はやっぱり入学式だよね！

ここは、とある次元に存在する世界。

この世界n…え？　それは小説情報で聞いたって？　あ、そう…

…コホン。気を取り直して…

この世界――ああ、もうこの辺省略！　小説情報と同じだし！　はいっ！

で、そんな世界にある一つの学園――超次元マクシア学園。

学力が高いことでも有名で、過去の守護女神達もこの学園を卒業していったとか。

そんな学園に向かう通学路に、三人の小さい少女が三人、楽しそうに談笑しながら歩いていた。

「どんな学校なんだろうね」

「…怖い人、いないかな…」

「大丈夫よ！　怖い人がいてもわたしとフウちゃんが守るから！」

三人の格好はそれぞれ長さの違うクリーム色の髪で、三人とも同じ制服――マクシア学園の制服を身に纏っていた。

この少女達の名前は、上から順に髪の長さを腰くらいまで伸ばしているしっかりとした感じの少女がフウ。

三人の中でも髪が一番短く、肩より少し上くらいの長さの大人しい感じの少女がロム。

二人の髪の長さの中間くらいの、肩より下まで伸ばしている活発そうな少女がラム。

三人は見ての通り、学園に新しく入学してくる生徒だ。

ちなみに身長は三人とも中学生くらいの小さい少女達だが、これでも高一の年齢である。

フウ「でも、これからはフウカお姉ちゃんにブランお姉ちゃんも一緒の学校なんだから、ちゃんと勉強も頑張らないとね」

ラム「もー、それはフゥちゃんでしょ。中学校はいっつも平均点ぎりぎりだったんだから」

フウ「うぐっ…」

ロム「ラムちゃんも…人のこと言えない…」

ラム「むぐっ…」

それぞれ痛いところを突かれ、顔を曇らせるフウとラム。

ちなみにロムは中々優秀な子だ。

フウ「…あ！　ほ、ほら！　学校見えてきたよ！　早く行こう！」

ラム「フゥちゃんがこの話の発端なんだけどね…」

フウ「過ぎたことを言わない！　ほら、早く！」

ロム「あ…待ってフゥちゃん…」

ラム「ちょっと！　わたしを置いていかないでよ！」

とまあ、入学当初から騒がしい少女達である。

フウ達は他の通学生徒達と共にマクシア学園の校門をくぐり、入学式が行われる体育館へと向かっていく。

フウ「ふぇー、人がいっぱいだ…」

ラム「わたし達はどこに並べばいいんだっけ？」

ロム「…あっち」

体育館に到着した三人は、新入生のならんでいる列にならび、入学式が始まるまで再び雑談を始める。

その頃、体育館の舞台裏では…

マジック「…学園長はまだ来てないのか？」

イストワール「はい…もうそろそろいらっしゃると思うのですが…」

この学園の教師達が、なにやら思案顔をしていた。

どうやら、入学式だというのに学園長がまだ到着していないようだ。

ケイ「学園長もどうしてこう重要な日に遅刻なんてするんだろうね」

トリック「まったくだ。…これはおしおきが必要だな…アククククク！」

アルヴィン「やめときなって、また返り討ちにあうから。…というかおたくも懲りないねぇ」

ブレイブ「学園長といえど、遅刻は許さん！　早く来るんだ！」

ジャッジ「お前もうるせぇよ」

学園に通う生徒にも変わったのが多いが、教師も例外ではなさそうだ。

ローエン「しかし困りましたね…学園長が来ないと入学式を始めることができません」

ジャオ「うむ…今どの辺りにいるんじゃろうか…」

プレザ「時間までに間に合うといいんだけど…」

そんな教師達が心配する学園長はというと…

「あ、あの…ホントに急いでるんですけど…」

「いいじゃん、ちょっとぐらい～」

チンピラに絡まれていた。

このチンピラに絡まれている先程の少女フウよりも少し背が高い程度の少女こそ、超次元マクシア学園の学園長、風音ツバキである。

というよりも、こんな中学生程度の身長の少女に絡むこの男達、ロリコンなのだろうか。

ツバキ「…今なんかバカにされたような…」

チンピラ「あ？　何言ってんの？　そんなことよりさーいいだろー？」

ツバキ（うぅー…このままだと間に合わない…今日は入学式なのに……こうなったら…！）

ツバキはしばらく困ったように考え込むと、突然チンピラに体当たりを繰り出した。

ツバキ「えぇいっ！」

チンピラ「ごふっ！？」

しかしただの体当たりではなく、ツバキが繰り出したのはどっかの武術で鉄山靠とかいう名前の技だった。

完全な不意打ちにチンピラも対応できず、モロに喰らって2～3メートル吹き飛んだ。

ツバキ「手加減はしたから死んではいない…はず…よしっ！　ごめんね！　今日は遅刻なんて出来ないから！」

吹き飛ばされたチンピラにそう叫んで（チンピラの耳には届いていないだろうが）、ツバキは学園に向かう道を走っていく。

見た目は普通の少女なツバキだが、これでも成人してるらしく、その上かなり強かったりする。

ツバキが学園前の坂道に差し掛かる頃には、既に登校中の生徒の姿は無く、時間もかなりヤバかった。

ツバキ「ヤバイヤバイ！　早くしないと！」

急いで坂を駆け上がるツバキ。

その途中で、ツバキはマクシア学園の制服を着た少年が一人で坂を歩いているのを見かけた。

ツバキ「お兄さん！　そんなにゆっくりしてると遅刻するよっ！」

「…あ…？」

急にツバキに声を掛けられた少年は、低い声でそんな反応を示した。

少年の外見はすこし青み掛かった黒髪の短髪でアホ毛があり、目は黒色だった。

ツバキ「あ？　じゃなくて、遅刻だよ遅刻！　ほら、走って走って！」

「あ、ああ…」

どうして自分より年下っぽい少女に命令されなきゃいけないのか、と思った少年だったが、ツバキの剣幕に押されて二人で一緒に坂を駆け上がった。

ツバキ「えぇっと…お兄さんは一年だね。それじゃ多分もう入学式始まってるから早く体育館に行った方がいいよ！　体育館はあそこにあるからね！」

自分も急いでいる為、一方的にそう説明して、ツバキは学校へと走り去ってしまった。

ぽつん、と一人残された少年は、少しした後ため息をついて、とぼとぼと体育館へと向かっていった。

ツバキ「到着っ！　ギリギリセーフだよねっ！？」

ミナ「アウトです。一体今まで何をしてたんですか！？」

チカ「本当です！　今日は新入生を迎える大事な日だというのに、

それにお姉さまを立ちっぱなしで待たせるなんてありえませんわ！」

体育館に到着したツバキは、早速教師達からのお説教を喰らっていた。

ツバキ「うぅ…ごめんなさい…途中で変な人に絡まれちゃって…」

トリック「何！？　どこのどいつだか知らんが許されん行為だ！学園の大事なようｚ…ツバキちゃんのためにそいつを粛清せねば！」

ジャッジ「いいからテメェは黙ってろ」

ローエン「まぁまぁ皆さん。学園長の挨拶までには間に合ったんですからいいじゃないですか」

ローエンが他の教師をなだめるようにそう言う。

その言葉にツバキはハッとした表情になり、自分の出番のことを聞く。

ツバキ「そうだ！　私の出番は！？」

プレザ「次よ。本当に危なかったわね」

プレザのその言葉に、ツバキは「あ、危なかった～…」と胸を撫で

下ろした。

「次は、学園長からの挨拶の言葉です」

と、丁度そんな放送が聞こえ、ツバキはコホン、と咳払いをしてから生徒達の前へと出た。

ツバキ「え、と…ちょ、マイク高すぎ…んしょっ！　あー、はい。皆始めまして！　私がこの学園、超次元学園の学園長の風音ツバキです！」

マイクの位置を調節して、ツバキは新入生達に挨拶をする。

新入生達の反応はというと、やはりというかなんというか、自分達よりも幼そうに見えるツバキを見て、殆どが驚いていた。

その反応も、生徒によって様々だった。

ラム「あ、あんなのが学園長！？」

ロム「わたし達と同じくらいに見えた…」

フウ「お姉ちゃん達とミナさんが驚くよって言ってたのはこれだったんだ…あとラムちゃん失礼だよ…」

「あいつ…学園長だったのか…」

「あの人が学園長…見た目は子供だけど、魔力の量が凄い…」

「…え？　マジ？　あの子が学園長？」

「わ、わたしとあんまり変わらないくらいの子なのに…不思議です…」

「あんぐりー」

自分と変わらないくらいなのにと驚く者達や、表情こそ変わらないが内心で驚いている者、ツバキの秘めた力の方に驚く者などがいた。

それからは校長恒例の長い話…かと思われたが、学園長自身も長い話は嫌いなようで、重要箇所以外は端折った説明で学園長の挨拶は終わった。

それからは二年生、三年生達が校歌を歌って、入学式は閉式した。

そしてここからは再びフウ達の視点に移る。

ラム「えっと、ここの教師だっけ？」

フウ「んと…うん。間違ってないよ」

ロム「お友達…できるかな…」

先程の入学式が終わった時、出口で先生に貰ったクラス振り分けのプリントを頼りに、フウ達三人は自分の教室へとやってきていた。

フウ「とりあえず適当な席に座れって先生は言ってたけど…」

「あ、フゥちゃん！　ラムちゃんとロムちゃんも！」

三人が教室に入って座る席をどこにしようかと考えていると、一人の少女に声を掛けられる。

ラム「その声は…やっぱり、ステラちゃん！」

「覚えててくれたんだー。久しぶりだねー」

フウ達に声を掛けてきた少女はステラという名で、三人の幼馴染みだ。

ロム「ステラちゃんも…この学校だったんだ…」

ステラ「ん、まぁね。ほら家があれだからさ…」

ステラの家はかなり有名な魔術師の一家で、その一家も代々この学園を卒業していったようで、それでステラも半ば強制的にこの学園にやってきたらしい。

ステラ「でも、フゥちゃん達がいるなら退屈しないで済みそうだよ」

フウ「それってさ、遠回しにわたし達といると何かしらの騒動に巻き込まれるって言ってないかな？」

ステラ「あははー、気のせいだよー」

ステラをジト目で見るフウ。

そんな視線を送られたステラはそう言いながら目を逸らした。

それからフウはステラと、ラムとロムはたまたま一緒のクラスだった他の国の女神候補生、ネプギアとユニと話して時間を潰していった。

フウ「…あれ？」

そんな時、フウが突然何かに気付いたような反応をした。

ステラ「フゥちゃん、どうかしたの？」

フウ「えっと、あの人さ…」

そう言って窓際の席を指差すフウ。

そこには、面倒そうな表情で窓の外を見ている少年がいた。

彼は先程学園長と共に学校に来た少年だ。

ステラ「男嫌いだったフゥちゃんが男子に興味を示すなんて珍しい。克服したのかな？　で、彼がどうかした？」

フウ「いや、別に男嫌いじゃないし、単にあんまり話す機会が無いだけだからね…じゃなくて、あの人、どっかで見たこと無いっけ？」

ステラ「え？　うーん…」

フウにそう言われ、少年を見つめ考え出すステラ。

そんな彼女達の視線に気がついたのか、少年は席を立ちフウ達に近付いてきた。

「…さっきからジロジロ俺を見てきて、何か用なの――」

少年はそこまで言って、フウとステラの顔を見て硬直する。

「…お前…フウとステラか…？」

それから二人の顔をまじまじと見つめながら少し考え込んだかと思うと、二人の名を呼んだ。

フウ「やっぱり！　アド君だよね！？　久しぶりだねーっ！」

「おわっ！　だ、抱きつくなって！」

この二人の発言から分かるとおり、この少年――アド・バウンスはフウ達のもう一人の幼馴染である。

久しぶりの再開に思わず抱きつくフウを、周りの目を気にしながら引き剥がそうとするアド。

フウ「むー、いいじゃん！　ホントに久しぶりなんだからちょっとぐらい！」

アド「少しは周り事も気にしろっての！　ここ学校だぞ！？」

フウ「あ…ぁぅ…／／／」

アドの言葉にここが学校であることを思い出すと、みるみる内に頬を真っ赤に染めてアドから離れるフウ。

ステラ「本当だよ。フゥちゃんってばわたしの事なんて何にも気にしないでアド君と話し始めてさー」

フウ「…だってアド君、あの日急にいなくなってからずっと何にも連絡もくれなかったから…」

そう言ったフウは、今度は泣きそうな顔になる。

フウ「…ぐすっ…寂しかったんだからね…バカ…」

アド「…相変わらず、照れたり泣いたり忙しないヤツだな」

ステラ「そう言うアド君も、相変わらずだね」

ステラの言葉に頭の上にハテナマークを浮かべるアド。

あえてここで説明しておこう、アドは鈍感である、鈍感である。（大事な事なので二回（ｒｙ）

アルヴィン「うーし、お前らー席に着けー」

アド「ん、ほら。先生来たぞ。席に座った方がいいんじゃないか？」

フウ「あ、そうだね。それじゃ、後で沢山お話しようね！」

アド「はいはい…」

先生が教室にやってきたことでそれぞれ雑談を中断し、席に戻っていく。

それからは先生からの軽い挨拶などでホームルームが終わり、各生徒達は下校していった。

かくして、変わった学園の変わった生徒・教師達の紡ぐ物語が幕を開けた――

学校の最初はやっぱり入学式だよね！（後書き）

――今日の学園長――

ツバキ「よし、今日の分終了っと！　んぅーっ…（伸びをしながら後ろに倒れ込む」

ガンッ！（片付けないで放置してあった掃除機に頭をぶつける音

ツバキ「っ！？　～～～～ッ…！！」

マジック「何をやっているのだ貴様は…」

学園の愉快な生徒達～一年生編～（前書き）

入学式から数日後の物語です！

一人一年生じゃない子がいますが、気にしたら負けです。

学園の愉快な生徒達～一年生編～

ツバキ「ということで、新入生さん達の様子をみにやってきましたー！」

アド「学園長、何がということなのか全くわかりません」

入学式から数日後、私が一年生の教室の扉を勢いよく開けながらそう言うと、すぐさまアド君がツッコミを入れてきた。

アルヴィン「いや、つーかおたく仕事はいいのかよ？」

ツバキ「これが仕事だから問題なし！」

アルヴィン君の問いに胸を張りながらそう答える。

…今ぺったんこだろって思った人、後で生徒指導室に来てね。

フウ「え？　仕事で来たんですか？」

ツバキ「うん。ほら、生徒達の事を何も説明しなかったら、読者の方が困るでしょ？」

ステラ「またメタな理由だね…」

ツバキ「こまけぇことは気にするな、だよ！」

そんな訳で、新入生さん達の様子の見学（私の暇つぶし）が始まった。

ステラ「今本音が聞こえた気が…」

ツバキ「ところで、フウちゃんとラムちゃん、ロムちゃんは高校生にしてはちっちゃいよね」

フウ「初っ端から失礼ですね！？　というか学園長も人の事言えないじゃないですか！」

ラム「そーよ！　ちびっこ学園長っ！」

ロム「ふ、二人とも…悪口はダメ…」

フウ・ラム「「この人（コイツ）が先に悪口言ったんだよ（のよ）！？」」

ツバキ「何を、正論をいっただけだよー」

フウ・ラム「「だから学園長（アンタ）に言われたくない！」」

おーおー、息ぴったり。

この三人って確か入学式の時も一緒だったね。そういえばルウィー

の候補生三姉妹だったけ、通りで仲がいいわけだね。

ツバキ「三人は仲良しだねー」

ラム「当たり前よ！　わたし達はいつでも仲良しなんだから！」

ロム「仲良し…」

フウ「だよ！」

ふふ、仲が良いのは良いことだよね。

ツバキ「それで…えと…へぇ…フウちゃんはアド君の事が「わああああっ！　なななんでそんな事メモしてるのぉっ！？」おっとと」

ここでちょっとした秘密ノート―（出所は秘密）に書いてあった事を言おうとしたらフウちゃんが顔を真っ赤にしながらものすごい勢いでノートを奪おうとしてきた。もちろん避けたけどね。

アド「何か呼んだか？」

フウ「あ、アド君は呼んでないし関係ないから！　あっち行ってて！」

アド「んだよ、気になるじゃないか」

フウ「いーいーかーらーっ！」

アド「おわわっ、押すな押すなって！」

自分の名前が呼ばれてやってきたアド君を、追いやるように押していくフウちゃん。

ふっふーん…あの反応からして本当っぽいねぇ。

ふふ、これは面白いねー♪

アルヴィン「あんまり弄ってやんなよ…」

ツバキ「いやぁ、面白くてつい、ね。…うん？」

呆れ顔のアルヴィン君と話していると、後ろから視線を感じた。

何だろうと思って後ろを向いてみると、教室の扉の陰からぬいぐるみを抱えた女の子が私の事を見ていた。

ツバキ「ね、何してるの？」

エリーゼ「（びくっ！）え、えと、その…」

気になったので女の子に声を掛けてみると、女の子は顔を赤く染めて俯いてしまった。

この子はえっと…エリーゼちゃんだっけ。

アルヴィン「あー、エリーゼ姫は人見知りが激しいからな。最近じゃクラスのヤツには慣れてきたみたいなんだが、あまり姿を見せないおたくだから恥ずかしがってんじゃねぇの？」

ツバキ「姫…？　…アルヴィン君、とうとうトリックと同じ領域に「ロリコンじゃねぇよ！？」あ、そう」

なぜかアルヴィン君がエリーゼちゃんの事を姫と呼んだから、直感でそう言ってみたら即行で否定された。

ある意味で、トリックがかわいそうな気がしたよ。同情は絶対しないけど。

トリック「ぶえっくしゅっ！」

ブレイブ「どうしたトリック、風邪か？」

ジャッジ「このアホが風邪なんぞ引くわけねぇだろ」

トリック「酷い言われようだな…いや、誰かに噂されてる気がしただけだ」

ツバキ「まぁいいや、えと、エリーゼちゃん？　エリーゼちゃんはお友達いる？」

エリーゼ「あ、ぅ…その…」

「いるよー！」

ツバキ「わわっ！？」

なんとなくエリーゼちゃんにそんなことを質問してみると、変わりにエリーゼちゃんが抱いていた人形が急に喋りだして、思わず驚いてしまった。

あぁ、びっくりした。

ツバキ「え、えぇと…君はなんていうの？」

「ぼくはティポっていうんだよー」

ツバキ「そう、ティポね。それで、お友達は誰がいるの？」

ティポ「えっとねー、ジュード君でしょー、ミラ君でしょー、アルヴィン君にローエン君、レイア君！」

エリーゼ「え、えと、後は…フウちゃんにロムちゃん、ラムちゃん達とお友達になりました…です…」

最初はティポが答えていってたけど、途中から勇気をだしたのかエリーゼちゃんが答えてくれた。

ツバキ「そうなんだ。それじゃ、もっとお友達ができるといいね」

エリーゼ「…はい！」

私の言葉に笑顔で返事をするエリーゼちゃん。

ふふ、お友達の事を話してるときも笑顔だったし、お友達が大切なんだね。

さて、次は…あそこに座ってる薄紫の髪の娘と黒髪ツインテールの娘のとこにでもいってみよう。

ツバキ「何やってるのー…って、勉強？　本格的な授業はまだじゃないっけ？」

「あ、はい。そうなんですけど、これから勉強も難しくなるのでちゃんと予習を…って学園長先生！？」

「ネプギア、アンタ気付いてなかったの？」

この娘達の名前は、えーっと、ネプギアちゃんとユニちゃんだっけ。確かそれぞれプラネテューヌとラステイションの女神候補生だったね。

ツバキ「まぁ、学校だから勉強するのは良いと思うけどさ、流石に今は休み時間なんだから他の子と話したりしたら？」

ネプギア「そうしたいのは山々なんですけど、先にお姉ちゃんの勉強の手伝いを終わらせないといけないので…」

ツバキ「お姉ちゃん……あぁ…」

そういえば前にねぷ子ちゃんが「勉強を手伝ってくれる優しい妹がいるんだー」とか言ってたっけ、ネプギアちゃんがそうだったんだね。

ツバキ「あまり無理はしないようにね」

ネプギア「はい、ありがとうございます」

なんていうか、姉にかなり甘そうな妹だなぁ…ねぷ子ちゃんが妹離

れできるか心配だよ。

それから二人と少し話をした後、今度は教室内で釜みたいな物を出してかき混ぜている娘達の所へ行ってみる。

…え？　なんで最初に行かなかったのかって？　ちょっと衝撃的で見ないふりしちゃってたんだよ…

ツバキ「あの、さ…何してるの？」

「見ればわかるですの。錬金術ですの」

「いや、それ知らない人からしたらなにしてるかなんてわかんないわよ…」

釜をかき混ぜながら答えるがすとちゃんに似た茶髪ロングポニーの娘に、ユニちゃんに似て違いが髪を下ろしてるくらいしかない娘が呆れ顔でそうつっこむ。

「というか、学園長でしたの？」

「気付いてなかったんだ…」

うん、なんかデジャヴ。

「申し送れましたの。私はデスペア・ザ・ハードですの。以後お見知りおきを、ですの」

「あ、アタシはフェイク・ザ・ハードよ。フェイって呼んでくれて構わな「それで、学園長は何の用ですの？」ちょっと、遮らないでよ！」

そう言って自己紹介をしてくれるデスペアちゃんとフェイクちゃん。

いや、まぁ名前は知ってるんだけどね。

ツバキ「えっとね、新入生さんの様子を見にきたんだよ」

デスペア「学園長自ら、ですの？　学園長といっても案外暇人ですの」

フェイク「アンタ少しは態度に気をつけたりしなさいよ…」

ツバキ「あはは…いいんだよ。暇なのには変わりないしね」

そんな感じで二人と話していると、急に辺りの雰囲気が変わった。

不思議に思って辺りを見回すと――

ツバキ「――っ！？」

フェイク「…どうかしたの？　…ってまさかデスペア、アンタ…」

デスペア「ちょっとした悪戯ですの」

フェイク「ちょっ！　何してるのよ！？　止めなさい！」

デスペア「…チッ…」

フェイク「舌打ちしたわよね今！？」

ツバキ「……？　今のは…」

…今、恐ろしい物が見えたような…何かの力っぽい感じだったけど…

…え？　何が見えたのかって？　…私の名誉の為に伏せておくよ。

（オリキャラ設定のツバキの欄の怖いｍ（ｒｙ

ちょっ！　勝手に暴露しようとするな！？

フェイク「す、すみません！　ちょっとデスペアが能力を…」

ツバキ「あ、やっぱ能力だったんだね…」

デスペア「ネタバレは良くないですの」

ははは…と苦笑いをしながら二人を見ていると、今度は後ろから殺気を感じた。

なんとなく危ない気がしたので、咄嗟に殺気の元に移動して獲物を奪った。

…って、これってグレネードライフル！？

「ちぃっ！」

殺気を飛ばしてきた人物は、武器を取られたからか腕につけたブレードみたいな武器で攻撃してくる。

ツバキ「うわ、っと！　危ないなぁ！」

グレネードライフルを抱えながらそれを避けていく。

もう、いきなり何事！？

フェイク「って、ふ、フロム！？　何でここにいるの！？」

ツバキ「フロム？！　だぁあ、もう！　ちょっとは大人しくしてよっ！」

「く、うあっ！」

どうやらフェイクちゃんの知り合いみたいだったけど、こんな状態じゃまともに話すらできないので足払いで転ばせて腕を取り無力化する。

ツバキ「もう！　急に襲ってくるのはいいけど、教室にグレネードランチャーはないでしょ！？
　教室吹き飛んじゃうよ！」

ステラ「襲うのはいいんだ…」

フェイク「あのフロムが、一瞬で…」

つっこみと変な反応をスルーしつつ、襲撃者にそう怒鳴る。

フロム「…私はアンタ等みたいな絶対強者っていうのを認めたくないだけだ」

ツバキ「そういう考えは別に否定したりしないけどさ、他の子に迷惑を掛けるのだけは止めてね」

フロム「…チッ…」

ああ、思い出した。この子確か二年に転入してきた子だっけ。

ツバキ「はい。それじゃそろそろ休み時間も終わりだし、自分の教

室に戻ってねー」

フロム「……」

ふと時計をみるともう休み時間が終わりそうだったので、私はフロムちゃんの腕を離して武器を返すと、フロムちゃんは何も言わずに去っていった。

キーンコーンカーンコーン…

ツバキ「あ、昼休み終わりだね。それじゃみんな、勉強頑張ってねー」

と、丁度その時チャイムが鳴ったので、私はみんなにそう言って学園長室へと戻っていった。

シュウ「…あれ？　俺の出番は…？」

アド「あ、お前いたの？」

シュウ「アンタ酷いっすねぇ！？　チクショー！　いつか絶対目立ってやるぞー！」

アルヴィン「そこ、うっさい」

シュウ「…スミマセン…」

アド「バカだな…」

ツバキがいなくなった後の教室では、そんなやり取りがあったとか。

学園の愉快な生徒達～一年生編～（後書き）

フロムが一年生の分に登場したのは、関連キャラが二人とも一年生だからです。

といっても、あまりセリフないですけどね…

学園の愉快な生徒達～二年生編～（前書き）

今回はツバキこと作者のハマっているゲームのネタが登場します。

学園の愉快な生徒達〜二年生編〜

学園長の一年生視察から次の日…

ツバキ「さて、と。今日は二年生の視察だけど…」

はい、マクシア学園、学園長のツバキです。

今回は前回に引き続き、二年生の視察にやってきています。

え？　なんで新入生の一年生だけじゃなくて二年生もやるのかって？　そりゃあ、キャラ紹介みたいなものだからね。

ツバキ「さて…多分この扉を開けたら、高確率で彼女が襲い掛かってくると思うんだけど…」

うん、それでも行くしかないよね、お話的にも。

…よし。

ツバキ「みんなー、こんにち（ガラッ、ドォーンッ！）わあああっ！？」

フロム「チッ、外したか…」

チッ、じゃないよ！　まさか出待ちしてるなんて思ってなかったよ！？

ツバキ「ああもう！　本当は使いたくなかったけど…！　えぇいっ！！」

私は向かってきたフロムちゃんをサっと避け、持ってきていたハンマーをくるりと回転させながら地面に叩き付ける。

すると、叩き付けた場所を中心に小さい円の範囲に地面を伝って電撃が走った。

フロム「ぐあああっ！？」

もちろん範囲内にいたフロムちゃんはモロに電撃を喰らい、膝をついた。

ツバキ「っ…ふぅ、電力はちゃんとセーブしてあるから動きを封じるだけだよ…本当に、できれば紹介の期間は襲ってこないで欲しいよ…」

フロム「く…アンタが襲っても良いって言ったんだろうが…クソッタレ…」

膝をつきながらそう毒づくフロムちゃん。

っ…はぁっ、範囲内の標的の動きを止めるのには使えるけど、ゴム靴でも履いてないと自分にもダメージが入っちゃうね…

アイエフ「色々とつっこみたい所があるんだけど…学園長。まずその武器は何？」

ツバキ「うぅぅー…これ？　ある本を見て作った工作武器のエレクトリッククラッシャー（Eクラッシャー）って武器」

ノワール「…一応聞くけど、その本の題名と著者は？」

ツバキ「…元モトクロスチャンピオンの人が書いた、誰でも簡単工作コンボ！　っていう本だよ」

がすと「…そんな本が出回ってることにまず驚きですの」

ベール「そんな本があったなんて…！　…今度貸してもらおうかしら…」

フウカ「というか、あの人そんな本出してたのね。薬代を稼ぐためかしら？」

う～…まだビリビリするー…

それから少しして私とフロムちゃんの痺れが引いてきた辺りで（ちなみにフロムちゃんが壊した場所はジャオさんが直してくれている。ありがとうジャオさん）、改めて視察を開始したんだけど…

ツバキ「…で、なんでフウちゃん達がここにいるの？」

フウ「いちゃダメなの？」

ラム「休み時間なんだからわたし達がどこにいようとわたし達の勝手でしょっ！」

フェイク「なんで喧嘩腰なのよ…」

いつの間に来ていたのか、一年生の生徒が何人かやってきていた。

まぁ、ラムちゃんの言うとおりなんだけどさ、いきなりだったからつい、ね。

ツバキ「それにしても、ルウィーの女神は五人もいて大変そうだねぇ。まぁこの作品的に仕方ない事なんだけどさ」

フウカ「今すごく普通にメタ発言したわね」

フウ「えへへー、お姉ちゃーん♪」

ロム・ラム「〜♪」

ブラン「…確かに、手のかかる妹が多くて大変。だけど…」

フウカ「えぇ。大切な妹達ですもの、大変だけれど、嫌に思ったことはないわ」

ツバキ「はぁー、妹さん達もそうだったけど、ルウィーの女神様達はみんな仲がいいんだねー」

うんうん、と頷きながら関心する。

仲がいいのは良いことだもんね。

ネプテューヌ「えー、姉妹の仲の良さなら私とネプギアだって負けてないよー！」

ノワール「あら、それなら私とユニも負けていないわよ」

ベール「わたくしとチカだって、血は繋がってませんけどあなたたちよりは仲の良い姉妹だと思いますわよ？」

ブラン「んだと！？　アタシらが一番に決まってるだろうが！！」

フウカ「…姉妹同士の仲はいいのに、どうして彼女達はこうなるのかしらね…」

ツバキ「あ、はは…」

どうやら女神様達は、姉妹の仲はいいみたいだけど他国の女神同士の仲は悪いみたい。

まぁ、あえて説明口調で言ってるけど、私も何度も見てるからね、この四人の喧嘩は…

ロム「また、始まった…」

ラム「いつものことだからほっといても大丈夫よ」

フウ「それよりも、最近プラネテューヌとかラステイションで新しく発売されたゲームとかってある？」

ネプギア「そうですね…あ、それなら――」

ユニ「ラステイションなら、あれが――」

ツバキ「…それに比べて候補生達は仲がいいんだね」

フウカ「本当に、ブラン達ももう少し仲良くして欲しいものだわ…」

呆れ顔でそう言うフウカちゃん。

まぁ確かに、傍から見ると温度差が凄いもんねー。

「まったく…相変わらず喧嘩ばっかりしてるんだなー」

そんなとき、私とフウカちゃんの背後からそんな声が聞こえてきた。
そしてその声が聞こえた途端、女神達…だけではなく、候補生達やフウカちゃんも凄い勢いで声の主の方に振り返った。
…その光景は地味にホラーだったよ。

女神達「「「「お兄様（兄さん）！！」」」」
候補生達「「「「お兄ちゃん！！」」」」
ツバキ「うるさっ…」

合計十人が一斉に叫んだため、思わずそう呟いてしまう。
この女神達が兄と呼んだ人は、最近転入してきたこの国の守護女神様、シルバーハート様ことユウ君。
プロフィールに男の娘とかなり強調されてたのが印象的な人だ。
噂によると各国の女神達はユウ君を溺愛レベルといえるほどに好きみたいだけど…

ネプテューヌ「お兄様！　まずは再開の証として私t痛っ！？」
ブラン「テメェネプテューヌ！　何抜け駆けしようとしてやがんだ！」

ベール「そうですわ、貴女達如きにお兄様は渡しませんわよ！」

ノワール「アンタ達はお兄様に迷惑ばっかりかけるじゃない」

フウカ「そう言う貴女だって人の事は言えないじゃない？　兄さんがどう思ってるかは知らないけれど」

さっきとは変わって今度はユウ君を巡ってまた言い争いを始める女神達。

今度はフウカちゃんまでも口論に参加している。

フウ「お兄ちゃーん！　えへ、なでなでしてー♪」

ラム「フゥちゃん、抜け駆けはずるいよ！　わたしもなでなでして貰いたいー！」

ロム「わ、わたしも…」

ユウ「はいはい。順番にしてあげるから仲良くね」

フウ・ラム・ロム「「「はーい♪」」」

ユウ君の言葉に嬉しそうに元気よく返事する三人。

ネプギア「でも、お兄ちゃんもこの学園に来たんだね」

ユニ「お兄ちゃんがいる分お姉ちゃん達が騒がしくなりそうだけどね…」

ユウ「はは…まぁあの五人はその方がらしい気もするけどね」

二人の言葉にフウちゃんとラムちゃんの頭を撫でながら苦笑いで答えるユウ君。

ま、私は学校を三部近く壊したり過剰な暴力とかを振るわなければいいけどね。

ツバキ「…で、ユウ君はあの五人だったら誰を選ぶのかな？」

女神達「「「「「！！」」」」」

ユウ「ちょっ、ツバキちゃん！？　なんで急にそんな話を！？」

なんとなく気になったことを聞いてみると、女神様達の目の色が文字通り変わった。

そしていきなりそんな地雷のような質問をされて慌てるユウ君。

ベール「いえ、お兄様。これはとても重要な質問ですわ」

ノワール「そうね、私達も気になるわ」

ブラン「いっその事お兄様に白黒つけてもらおうじゃねえか！」

ネプテューヌ「ふーんだ！　私に決まってるでしょー！」

フウカ「その自信はどこから来るのかしらね？　ねぇ、兄さん？」

フウ（フウカお姉ちゃん、顔怖い…）

ネプギア（というより、五人とも怖いです…）

ラム（い、いつもよりお姉ちゃんが怖い…）

ロム（ぶるぶる…）

ユニ（ていうかなんであんな質問したのよ！）

それは、もちろん…

ツバキ（面白そうだったから！）

候補生達（（（（（えぇー…））））））

いや、ダメだこいつみたいな目で見られても。

ツバキ「さて、次行こうかな」

ユウ「ちょ、俺放置！？」

……

ツバキ「……～♪」

ユウ「無視！？」

フウカ「兄さん？　余所見はダメよ？」

ネプテューヌ「そうだよー！　早く教えてー！」

背にそんな騒がしい声を受けながら、ユウ君達から離れていく。

フロム「アンタも案外鬼だな」

ツバキ「やー、人間が鬼なわけないでしょー」

フェイク「そう言う意味じゃないでしょ…」

移動した先でフロムちゃんに話しかけられたので、わざとそう返すと近くにいたフェイクちゃんがつっこんできた。

うん、意味が違うっていうのはわかってるからね？　流石に。

デスペア「まったく、フウカがあっちにいるからつまらないですの」

ツバキ「あぁ、そういえばデスペアちゃんは前にフウカちゃんと一緒にそうやってお茶会してたよね。何話してたの？」

デスペアちゃんがティーカップでお茶を飲んでいる所を見て、ふと思い出したことを聞いてみる。

デスペア「相手を絶望させる方法、などですの」

ツバキ「……へっ？」

デスペア「でもそれは表面上での話ですの」

ツバキ「……？？」

なんか内容が凄く物騒な気がしたけど、表面上ってなんだろう？

デスペア「でもそれもフウカがあっちにいるせいでできないですの。つまらないですの」

ツバキ「それにしたらすっごくティータイムを満喫してる気もする

けど…」

フロム「細かい事気にしていると禿げるぞ」

ツバキ「禿げないからね！？」

流石の私も禿げるのは勘弁だね…。

ツバキ「それにしても、さっきからフェイクちゃんはフロムちゃんにベッタリだねぇ～」

フェイク「そ、そう、かな？」

ツバキ「まぁ、私は別にどんな恋だろうと応援するよ」

フロム「おいアホ学園長。私に同性趣味はないからな」

そうは言うけど、現状の彼女達はどう見ても恋人同士です。本当に（ｒｙ

フロム「今何考えた？」

ツバキ「いいや、なーんにも？　ま、お邪魔みたいだから私はお邪魔するよー」

フロム「殺すぞ」

ツバキ「殺されないよーだ」

フロム「…本当に殺れないから無性に腹が立つ…！」

おぉ、怖い怖い。

とりあえずまたグレネードランチャーをぶっ放されても困るので、
さっさと違う生徒のところに向かう。

ツバキ「というわけでケイスくんお待ちどおー」

ケイス「別に待ってたわけでもないですけど」

とりあえず一人女神達を見ている少年――転入生のケイス君と話を
してみることにした。

ツバキ「あと、別に無理して敬語にしなくていいからね？　普通に
ツバキって呼んでくれて」

ケイス「いや、でも学園長ですし…」

ツバキ「その学園長が言ってるんだからいいのいいの、ね？」

ケイス「はぁ…じゃあ…ツバキさんで」

ツバキ「んー、まぁいいや」

別に呼び捨てでも構わなかったんだけどねー

ツバキ「そういえば剣術の腕がいいんだってね？　この前ブレイブが手合わせしたいものだって言ってたよ」

ケイス「まぁ、それなりには…でも剣道部の顧問の先生なんかには流石に勝てませんよ」

ツバキ「私の経験上、そうやって謙遜する人は大抵凄い人なんだよねぇ」

うん、本当にそんな感じがするよ。

ツバキ「にしてもさっきから女神様達…というより、なんとなくノワールちゃんを見てるように見えるのは私の気のせいかな？」

ケイス「ど、どうしてわかったんですか？」

ツバキ「いやぁ、なんとなく見てたらわかったよー？」

ケイス「そうですか…いや、俺前にノワールさんに助けてもらったことがあって、一度会ったことがあるんです」

ツバキ「ほぇー、そんなエピソードがあったんだ」

でもなんか、それだけじゃないっぽいなぁ。

…くふふ、面白そう…って思ったけど、そろそろ時間だなぁ…

アイエフ「学園長、そろそろ時間ですよ」

ツバキ「あ、うん。わかってるよ」

こんぱ「ねぷねぷ達、ずっと喧嘩しっぱなしですね…」

日本一「でも、喧嘩するほど仲が良いって言うじゃん？」

がすと「候補生様はともかく、女神様達はとてもじゃないですが仲が良さそうにはみえないですの」

ケイス「はは…」

うん、まぁ、そうだけど。

ユウ「だああっ！　もう！　ツバキちゃん、これ借りるよ！」

ツバキ「あっ」

女神様達の取り合い合戦がとうとう嫌になったのか、ユウ君が突然

私からEクラッシャーを奪っていった。

ツバキ「ちょっ、それ出力とか調整しないと危な――」

ユウ「いい加減にしろーっ！」

私の静止も間に合わず、ユウ君はEクラッシャーを地面に叩き付けた。

電力の制御方法をよくわかってない人がああいう武器を使ったらどうなるか、みんなにはわかるかな？

それはだね…

バチバチィッ！

二年クラスにいた全員『『『ぎゃあああああああっ！！！』』』

はい、正解は放電を起こす。でした。

…結局、その日の二年生と一部の一年生と私はチャイムがなっても五分間ほど痺れて動けないでいましたとさ。

…持ってきた私には非があるけどさ、フロムちゃんとかアイエフち

ゃん辺りは完全なるとばっちりだよね…これ…

何はともあれ、今日の二年生視察はこれにて終了となった。

学園の愉快な生徒達～二年生編～（後書き）

―椿の花と黒い風の舞台裏・学園出張版―

黒フウ「……なんでこっちの世界にまでこなくちゃいけないの…」
ツバキ「まぁまぁ…いいじゃん…ぁぅぅ…」
黒フウ「……まだ痺れてるの…？」
ツバキ「結構威力あったからね…あれ…」
黒フウ「……まぁそれはいいとして…あの武器は何…？」
ツバキ「あれは、私（作者）が最近ハマってるゲームのＤＥＡＤ ＲＩＳＩＮＧ２ ＯＦＦ ＴＨＥ ＲＥＣＯＲＤってゲームにでてくるコンボ武器っていう武器」
黒フウ「……まえがきのはそう言うこと…」
ツバキ「うん。ぶっちゃけるとこの学園は私のハマってるゲームのネタがでやすくなってるよ」
黒フウ「……どうでもいいよ…」
ツバキ「本の著者のネタはそのゲームの前作、ＤＥＡＤ ＲＩＳＩＮＧ２主人公のことだよ」
黒フウ「……とすると…次登場するとしたらＢＡＳＡＲＡ…？」
ツバキ「まぁ、多分ねー」
黒フウ「……多分って…まぁいいよ…。……それじゃ…今回はこの辺で…」
ツバキ「次はエクシリア勢の三年生編だよ！ ネタが少なくなる可能性がかなりあるからｇｄると思うけど勘弁してねー！」

学園の愉快な生徒達〜三年生編〜（前書き）

投げやりな気もするけど気にしない！

黒フウ「……気にしろよ…」

学園の愉快な生徒達〜三年生編〜

ツバキ「三年生の諸君！　学園長の視察タイムだよー！」

ジュード「あ、やっぱりここにも来たんdうわあああああっ！？」

おお、いいリアクション。

ということでみんな、はろはろー♪　学園長のツバキだよー。

今日は三年生の視察の日です。

で、なんでジュード君が驚いているのかというと、私が宇宙人みたいなマスク、レーザーアイをつけて教室に入ったからだ。

ミラ「…ツバキ、それは一体なんだ？」

ツバキ「前話にでた本で作った工作装備ー。熱線もだせるんだよー！」

レイア「危なっ！？」

マスクを脱ぎながらそう説明すると、レイアちゃんがそうつっこむ。

えー、カッコイイじゃん、ビーム。

ジュード「はぁ、びっくりした…って、わああああああっ！？」

ミラ「今度はなんだ！？」

ツバキ「…あ、さっき遊びで目を変えてたの、元に戻すの忘れてた」

そう言って自分の目に手をかざし、元に戻す。

さっきまでの私の目はハイライトが消えた状態、所謂レイプ目というやつだったんだ。

アグリア「どんな遊びでそんなんになるんだよ…」

レイア「一種のホラーだったよ…」

ツバキ「あはは、ごめんごめん。それにしても、ジュード君の反応は面白いね～」

ジュード「面白くないですよ！　まったく…」

ありゃ、怒らせちゃった。

ツバキ「まぁいいや。じゃ、さっさと紹介済ませちゃおうか」

ミラ「誰に紹介するのだ？」

ジュード「ミラ、それは聞いちゃダメだよ」

ガイアス「しかし思ったのだが、彼女はいつも何処に持ち物をしまっているのだろうか」

ウィンガル「ギルドとしては、是非ともその技法をご教授してもらいたい物ですが…」

ミラちゃんとジュード君が話してる横でガイアス君とウィンガル君がそんな話をしていたけど、

ふっふっふ、これは企業秘密なのですよ。

さて、ぶっちゃけ三年生は人数も少ないから殆ど地の文でいいよね、モブは基本スルーだし。

なんか今「ひでぇ」って声が聞こえた気がしたけど、気のせい気のせい。

じゃ、最初はわたしがマスクと目で驚かせたジュード君。

彼はこの学園でもかなり高レベルな治癒術を使えて、よく保健室にいることが多いね。保険委員長だし。

ジュード「あ、そういえば最近二年に転入してきたユウって人がよく保健室に胃薬を貰いに来るんですけど、彼、何か胃に異常でもあ

るんですか？」

ツバキ「あー、ユウ君ね…。彼さ、二年と一年にいる女神様達のお兄さんだから、苦労人なんだよ」

ジュード「あぁ、そうだったんですか…」

女神様って名前を出しただけで納得するジュード君。

…まぁ、女神様達はしょっちゅう暴れてるからねぇ…

ツバキ「だから話し相手になってあげてね？　多分ジュード君なら気が合うと思うからさ」

ジュード「あ、はい。僕もなんとなく彼とは気が合いそうな気がしてましたし」

あぁ…ジュード君もツッコミ役だから苦労人だったね…

よし、次、次はミラちゃんだね。

ミラちゃんは本名、ミラ＝マクスウェル。

この名前からわかるように、この世界の各都市に存在している大精霊の主である、マクスウェルの人の姿だ。

と、言っても、大精霊のマクスウェルは別にいるんだけどね、ミラ

ちゃんはそれの半身みたいな感じかな。

ミラ「ツバキ、この間二年の転入生とすれ違ったのだがかなり嫌われた様子なんだ。何か心当たりはないだろうか？」

ツバキ「嫌われた？　その子ってどんな子？」

ミラ「うむ、二人組で片方は白髪で、もう片方は何やら絶望がどうのと言っていたな」

あぁ…多分フロムちゃんとデスペアちゃんだよね…

うーん、まぁ確かにあの二人はミラちゃんの事を嫌いそうだね…性格とか、諦めないような所とか。

ツバキ「うーん…まぁ、ミラちゃんが悪いわけじゃないから、気にしなくてもいいと思うよ」

ミラ「そうか？　ならいいが」

いいんだ、それで…

はい、次ー。レイアちゃんだね。

レイアちゃんはたしか宿屋の娘だったっけ。

料理も美味しいし、結構人気な宿屋だったはず。

レイア「あ、そういえば、お母さんが次会った時はアタシが勝つよ！って言ってたよ」

ツバキ「ソニアさんが？」

ちなみにソニアさんって言うのはレイアちゃんのお母さんの事で、私がソニアさんと知り合ったのは闘技場で戦ったとき。

その時から何度も戦ってるんだけど、まだ決着がついたことがないんだよねぇー…

ちなみにソニアさんはル・ロンドの魔人っていう二つ名があったりする。

ツバキ「あはは…うん、わかったよって伝えといて」

レイア「りょーかいー。…でもツバキさんとお母さんの戦いって、別次元の戦いだよね…」

ツバキ「そうかなー？　お互い全力で戦ってるだけなんだけど…」

ジュード「一度闘技場を半壊させておいてよく言いますよ…」

あぁー、そんなこともあったねぇ…その後修理を手伝わされて大変

だったけど。

さて、残るはガイアス君、ウィンガル君、アグリアちゃんの三人だね。

この三人…正確には、先生をやってるジャオさんとプレザさんもなんだけど、彼等はこの世界のモンスター関連の事件とかをまとめている組織、ギルドのメンバーで、ガイアスさんはそのリーダーなんだよ。

なんでそんな人達がこの学園にいるのかって？　そんなの今更だよ？

アグリア「おいブス！　あんましテメェらばっかし話してたらアタシ達の出番が少なくなるじゃねーか！」

レイア「ちょ！　だからそういうこと言わないでよ！」

ガイアス「アグリア。学園長の前では少しくらい礼儀正しくしろ」

アグリア「は、はいっ！」

レイア「…わかりやすい性格…」

アグリア「あぁ？　なんか言ったかぁ？」

レイア「いいえーなんにもー」

相変わらずこの二人は犬猿の仲なんだね…

ウィンガル「ところで、学園長」

ツバキ「うん？　なぁに？」

ウィンガル「もう始業時間です」

ツバキ「えっ！？」

そう言われて時計を見てみると、確かに始業五分前だった。

くっ…レーザーアイの製作に手間取ったのが原因か…っ

ツバキ「…仕方ない、今日はここまでだね。それじゃ諸君、授業頑張ってね～」

それだけ言い残して、私は三年教室を後にした。

「さて…これで生徒達の紹介も終わりかな？」

ふぅ、とそう呟きながら学園の時計の所に腰掛ける。

よく危ないって言われるけど、私はここがお気に入りの場所。

…思えば紹介になってなかった気もするけど、気にしたら負けだよっ！

「さて、新しい子も入ってきて、どんなことが起こるかなぁ…今から楽しみだなぁ」

こっそり持ってきていたアイスを咥えながら、頬を緩ませて呟く。

今回入学・転入してきた子達はみんな個性的だったからね、これで平和が続く方がおかしいよ。

「まず、そんなの私が許さないし、ね♪」

そんな感じで、私はこの先に起こる、この学園での出来事を想像しながら、一人静かにアイスを食べていた。

その後いーすんやマジック達に怒られたのは言うまでもない…くすん…

学園の愉快な生徒達〜三年生編〜（後書き）

―椿の花と黒い風の舞台裏・学園出張版―

ツバキ「はいはいあとがきあとがきー」
黒フウ「……少し投げやりじゃない…？」
ツバキ「気のせいだよー。さて、今回で三学年全部を回ったね」
黒フウ「……次回からは…生徒の視点の物語…」
ツバキ「ま、次の話以降はあんまし決めてないんですけどねっ！」
黒フウ「……ダメじゃん…」
ツバキ「…ま、まあ、次の話を書いてる途中にきっと思いつくよ！うん！」
黒フウ「……大丈夫かな…」
ツバキ「では！　次回もお楽しみにー、です！」

新入生&転入生の実力試験！（前書き）

今回短めです。

実戦編は前編後編に分けるかも。

新入生&転入生の実力試験！

―フウ視点―

ツバキ「はいー、ではこれから、一年生と転入生達の実力試験を行いまーす！」

とある日、わたし達一年生と二年に転入してきた一部の人達が学園の校庭に集合していた。

学園長の話によると、新しくこの学園に来た人達の実力テストをやるみたい。

ツバキ「ルールは簡単！　今から私が召喚するモンスターを狩る！　それだけ！」

フウ「ものすごい簡潔だ！？」

あまりにも簡潔だったので、思わずそう叫んでしまった。

ステラ「でもまぁ、わかりやすくていいんじゃない？」

アド「そうだな、回りくどい説明とかよりはずっとわかりやすい」

フロム「ああ、それに単独なら私としてもやりやすくて助かる」

フェイク「アタシはフロムと一緒がよかったけど…」

デスペア「ここでも惚気る気ですの？」

それぞれが思ったことを口にする。

ツバキ「あ、別に無理して一人でやる必要はないからね、最大で四人くらいまでなら一緒でもいいよ。その代わり、モンスターをちょっと強くするけどね」

なるほど、一人じゃ自信がなかったら他の人と組んでもいいってことだね。

うーん…わたしは一人でも大丈夫かな？

アド「じゃ、俺は一人で――」

シュウ「アドぉー！　一緒にやろうぜっ！」

アド「嫌だ」

シュウ「即答！？」

アド「冗談だ。仕方ねぇから組んでやるよ」

シュウ「なんでそんな上から目線！？」

アド君はシュウ君と組むみたいだね。

フロム「私はもちろん一人で」

フェイク「え…フロム、一緒に…」

フロム「……」

フェイク「……」

フロム「…あー、ったく、わーったよ…」

フェイク「……♪」

デスペア「…チッ、リア充爆ぜろ、ですの」

フロムさんはフェイクさんと、デスペアさんは一人みたい。

ネプギア「四人までいいなら、候補生みんなでやってみない？」

ユニ「そうね、相手が強くなるなら望むところだし」

ロム「でも…フゥちゃんが…」

ネプギア「あ、そっか」

フウ「あ、いいよ、わたし一人で行ってみるから」

ラム「え？　いいの？」

フウ「うん。四人で頑張ってきなよ」

ユニ「悪いわね、フウ」

ということでネプギアさん、ユニさん、ロムちゃん、ラムちゃんは四人で挑むみたいだ。

ステラ「じゃ、私は一人で行ってみようかな」

ケイス「俺もそうするかな、自分の実力を測ってみたいし」

ユウ「じゃ、俺も一人で」

ステラちゃん、ケイスさん、ユウさんは一人で挑戦、かな？

エリーゼ「え、えっと…えっと…」

フウ「あ、エリー。…もしよかったら組む？」

エリーゼ「あ……う、うんっ…！」

エリーが一人でおどおどしてたから、おせっかいかな？　と思いつつそう言ってみると、力強く頷きながら答えてくれた。

ということでチームは、

私・エリー

アド君・シュウ君

ステラちゃん

ネプギアちゃん・ユニちゃん・ラムちゃん・ロムちゃん

フロムさん・フェイクさん

デスペアさん

ケイスさん

ユウさん

と、こんな感じになった。

ツバキ「ひーふーみー…全部で八グループかな？　ちょっと多い気もするけど、ま、いっか」

そう言うと学園長は急に何かをぶつぶつと詠唱したかと思うと、急にカードみたいなものを地面に叩き付けた。

すると、学園の周りに結界が張られた。

なるほど、召喚したモンスターが外に出ないようにと、外に被害が出ないようにしたんだね。

ツバキ「さて、と。それじゃー、始めよっかー！」

ということで、新入生と転入生の実力テストが始まった。

新入生&転入生の実力試験！（後書き）

―椿の花と黒い風の舞台裏・学園出張版―

ツバキ「今回、本文短めにして早めに投稿してみたけど、どうかな？」

黒フウ「……といっても、今回くらいだろうけどね…」

ツバキ「それは言わないで。たまにこう、インスピレーションみたいなのがピーンってきて、うまくいった結果なんだから」

黒フウ「……大抵、ハイテンションになってる結果、バックキーとか押してパーになってるけどね…」

ツバキ「あ、あれはちょっと間違えただけだよっ！　最近はちゃんと気をつけてるんだから！」

黒フウ「……あとオリキャラを貸してくれた作者様へ…チームはツバキが直感で決めちゃったけど…これでいい…？」

ツバキ「変えて欲しい、この子と組ませて欲しい、なんてのがあったら感想に書いてくれると助かります！」

黒フウ「……それじゃ…今回はこの辺で…。……次回も…お楽しみに…」

新入生&転入生の実力試験　その一（前書き）

遅くなってすみません…

とりあえず８チーム÷２＝４話に分けていくと思います。

新入生&転入生の実力試験　その一

ツバキ「それじゃ、始めていこうかー」

チームもそれぞれ決まって、いよいよ実力試験が始まろうとしていた。

ツバキ「じゃ、最初はアド君のチームからねー」

アド「ん、早速か」

シュウ「っしゃ！　どうせでてくるモンスターなんて雑魚だろうし、余裕だねー！」

…あ、今シュウ君の言葉を聞いて学園長がニヤリと笑ったような…

フウ「…アド君、気をつけてね…」

アド「わーってる。あの顔は絶対その辺の雑魚を出す気はないっぽかったしな」

アド君も気付いてたみたいで、気を引き締めてグラウンドの中央へと向かっていった。

…ホントに大丈夫かな…

ツバキ「んじゃー、ちゃっちゃと始めちゃうよー。準備はいいねー？」

アド「あぁ」

シュウ「バッチリっす！」

ツバキ「はい、それじゃー…開始っ！」

そして学園長は開始の合図と共にさっきとは違うカードを投げた。

カードがアド君達の居る前辺りの地面に到達すると魔法陣が展開され――

シュウ「…はい？」

アド「マジかよ…」

そこから現れたのは、チェック模様のイルカのモンスター、ドリコリンコプスだった。

フロム「なんとなく予想はしてたが…早速危険種モンスターかよ…」

デスペア「学園長が世界にモンスターをばら撒いてたりするんじゃないですの？」

ケイス「いや、それは無いだろ…」

ユウ「なんだったかな。確かあのカード、モン〇ターボールみたいなものだって聞いたことがある」

フェイク「そんなものがあるんだ…」

…ほ、ホントにホントに大丈夫、かな…？

アド「っ！　危ねぇっ！」

シュウ「うおわっ！？」

二人が出てきた敵を見てぼーっとしていると、ドリコリンコプスが口から水の弾丸を発射し、二人は咄嗟にそれを避ける。

アド「チッ、うおらぁっ！」

アド君は横っ飛びの回避から続けて素早くドリコリンコプスに近付き、双剣で斬りかかる。

アド「斬光時雨！」

通常攻撃からほとんど隙のない連撃で攻め、すぐさま距離をとる。

やっぱりアド君は強いなぁ…

ベール「なかなか速いですわね、あの子」

ブラン「…あの程度、まだまだよ」

シュウ「ぼ、僕だってぇ！」

そんなアド君を見てか、シュウ君も剣を構えてドリコリンコプスに斬りかかる。

「キュォォオオッ！」

シュウ「へっ？　ぶふぅ！？」

でも相手もやられっぱなしではなく、向かってきたシュウ君を素早いタテ回転からの尾びれ攻撃で吹き飛ばした。

吹き飛ばされたシュウ君はそのままアド君に向かって…って危ない！？

アド「うおっ！？」

アド君も自分の方に飛んできたと理解したみたいで、慌てつつもシュウ君を蹴り返した…ってえぇっ！？

ネプテューヌ「おおー、コンボが繋がったね！」

ノワール「見事な鋭いキックだったわね」

いや、そういう問題じゃ…

シュウ「ぎゃあああっ！？」

蹴り返されたシュウ君はそのままドリコリンコプスに直撃し、また違う方向に飛ぶ。

今度は…学園長の方だ。

ツバキ「…ん？　ってわああっ！？」

シュウ「ぶべっ！」

どこか上の空でギリギリまで気付いてなかった学園長は、シュウ君が自分に向かって飛んできてるのを理解した瞬間、慌てて殴り飛ばした。

ツバキ「ってあぁ！　つい反射的に！　だ、大丈夫！？」

シュウ「し、死にそうっす…」

がすと「…さらに繋がったですの」

日本一「おー、3コンボだねー！」

コンパ「あ、あの人、大丈夫でしょうか？」

アイエフ「何かアイツ、丈夫そうなイメージだから多分大丈夫よ」

フウカ「そういう問題かしら…？」

ツバキ「わああ！　衛生兵ー！　えーせーへー！」

ジュード「はぁ…コンパさん、救急箱持ってます？」

コンパ「あ、はい、いつでも持ってますですよ」

観戦していた二年生の人達が色々と言い、ジュードさんとコンパさんがシュウ君の応急手当をしに向かう。

ツバキ「…ってあれ？　いつの間にか倒してたんだ？」

だけどそんな学園長の言葉に皆「え？」と不思議な声を上げて、モンスターのいた場所を見る。

そこでは、ドリコリンコプスが目を回して気絶していた。

ユニ「まさか、さっきアイツがぶつかったときに…」

ネプギア「はい、その時に気絶してました…」

どうやらアド君の蹴り返したシュウ君があのモンスターに当たったときに気絶してたみたいだ。

…意外と威力強かったんだね。

アド「へぇ、シュウストライクとでも名付けて必殺技にでもするか？」

シュウ「死ぬわぁっ！」

グラウンドにそんなシュウ君の叫びがこだまして、二人は合格になった。

ちなみに気絶したドリコリンコプスは学園長が回収していた。
次は…フロムさんとフェイクちゃんの番みたいだ。

ツバキ「それじゃ、準備はいい？」

フロム「オーケー、どっからでもかかって来やがれってんだ」

フェイク「…フロムの邪魔にならないようにしないと…」

フロムさんは準備万端な様子で、フェイクちゃんは何かをブツブツと呟いている。

ツバキ「んじゃ、二人の相手は…これだね！」

そう言って学園長はまたカードを取り出し、モンスターを召喚する。
続いて現れたモンスターは…

「ギ、ギギ…目標（ターゲット）ヲ捕捉。模擬戦闘ヲ開始シマス」

フロム「コイツかよ…」

フェイク「キラーマシン…」

あのキラーマシンだった。

ラム「って、なんでコイツがいるのよ！？」

ロム「前に封印した…のに…」

フウ「でも、前に見たときより嫌な感じがしないよ…？」

今言った通り、前にルウィーで封印されてたものの封印が解けちゃった時に見たキラーマシンよりも、邪気みたいなものが感じられない。

ツバキ「あぁ、その封印が解けた時に一匹襲ってきたのを拝借して、人を襲わないように改造したんだよ」

ブラン「…そんなこともできるのね…」

キラーマシンについて説明する学園長に、ブランお姉ちゃんが呆れ気味にそう言う。

ま、まぁ、人を襲ったりしないなら、いい…のかな？

フロム「ま、どっちにしろぶっ壊すだけだけどな。フェイク、射線上には立つなよ」

フェイク「わ、わかったわ」

そう言って武器を構えるフロムさんとフェイクちゃん。

でも確か、キラーマシンって相当硬かったような…

フェイク「このぉッ！！」

戦闘が始まってまず最初に動いたのはフェイクちゃん。

キラーマシンに向けて両手に持ったアサルトライフルを連射していく。

キラーマシン「損傷軽微。攻撃開始」

しかし流石の装甲といったところか、キラーマシンへのダメージは殆ど通ってないみたいだ。

機械的な声が響き、キラーマシンが手に持ったモーニングスターを振り上げフェイクちゃんへ突撃していく。

フェイク「く、効いてない…」

フロム「フェイクッ！　そのまま撃ち続けてろッ！」

フェイクちゃんへと迫るキラーマシンの腕の関節部分を狙ってグレネードを撃ちながらそう叫ぶフロムさん。

その爆撃によりキラーマシンの片腕が吹き飛び、モーニングスターと腕が地面に転がる。

フェイクちゃんはフロムさんの言葉に頷き、徐々に後ろに下がりながら銃を乱射し続けていく。

ステラ「銃器には詳しくないからよくわからないけど…あの撃ち方ってどうなの、フゥちゃん？」

フウ「うーん、わたしアサルトライフルは使った事無いからあんまり良くわからないけど…やっぱり精度は落ちるんじゃないかな。弱点が一部分の敵にはあまり向かないかも」

隣で戦いを見ていたステラがそう聞いてきたので、わたしなりの考えで返す。

まぁ実際、連射系の銃器に精密射撃も何もないんだけどね。

フロム「隙だらけなんだよ鉄塊野郎ッ！」

と、銃撃を浴びながらもどんどんフェイクちゃんに接近していくキラーマシンの背後から、銃を置いたフロムさんがもう片方の腕目掛けて跳び、右腕の…パイルバンカーだっけ、で関節部分を貫いた。

キラーマシン「両腕関節、損傷。戦闘続行不可。戦闘ヲ終了シマス」

両腕を破壊されたキラーマシンはそう言うと、電源が落ちたかのように動かなくなった。

ツバキ「はぁー、流石に関節部分を狙われたらこの程度かぁ。ま、ともかく二人も合格だね」

フェイク「フロム！　やったね…！」

フロム「あー、喜ぶのはいいが私はさっさと火傷の応急処置をしたいから引っ付くな」

合格といわれて喜ぶフェイクちゃんに、面倒そうにそう言うフロムさん。

…あの武器ちょっと欲しいと思ったけど、火傷するんだ…

フウカ「あら、フロムはあまり群れて戦うのは得意じゃないのではなかったのかしら？」

デスペア「ですの。でもフェイクとはヤケに相性が良いですの。リア充マジで爆発しやがれですの」

フウカ「どうしてそんな言われようなのかは知らないけれど、まぁあの二人の仲が親密というのはよくわかったわ」

そんなこんなで、フロムさん・フェイクちゃんも無事に合格する事ができたみたいだね。

…わたしも頑張ろうっ。

新入生&転入生の実力試験　その一（後書き）

――今日の学園長――

ツバキ「はー、しかしこれはまた直さないとねー」
イストワール「…そんな事言って、また仕事を抜け出す口実にするのでしょう？」
ツバキ「…な、ナンノコトカナー…」
マジック「とぼけても無駄だ。アレの修理は別のヤツにやらせる、貴様は自身の責務を真っ当しろ」
ツバキ「そ、そんなー…」

ブレイブ「普段、怠けてるからああなるのだな」
トリック「あぁ、涙目なツバキたんマジ可愛い！」
ジャッジ「テメェはマジでキメェから黙れ」
トリック「それは無理な話だな。幼女がこの世に存在する限り、我輩は幼女を愛し続け」「（ジャッジ）黙れ」るうぅぅぅぅ…！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0444y/

女神と精霊と学園物

2011年12月8日01時48分発行